

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

ぼんたいおんはか

こと

（梵帝御計らいの事）

新版
1864
〜
1868

うえのどのごへんじ

ぼんたいおんはか

こと

上野殿御返事（梵帝御計らいの事）

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

なんじようとときみつ

建治3年('77) 5月15日

56歳

南条時光

ごがつじゅうよつか

芋

頭

いちだ

送

給

五月十四日に、いものかしら一駄、わざとおくりたびて

そうろうとうじ

芋

ひと

暇

もう

たま

薬

候。当時のいもは、人のいとまと申し、珠のごとし、くすり

のごとし。

仰

遣

そうろう

承

そうら

さては、おおせつかわされて候こと、うけたまわり候

いぬ。

いんきつぽ

もう

ひと

いちにんこ

はくき

もう

親

尹吉甫と申せし人は、ただ一人子あり。伯奇と申す。おや

けん

こ

賢

ひと

なか

もう

違

も賢なり、子もかしこし。いかなる人かこの中をば申ししたが

うべきとおもいしかども、思 継母よりよりうつたえしに用いままはは 時々 訴もち

ざりしほどに、ままはは 数年 あいだ 様々 謀 継母、すねんが間ようようのたばかりをな

せし中に、なか はち もう 虫 わ 懷 い 急 蜂と申すむしを我がふところに入れて、いそぎ

いそぎ伯奇にとらせて、はくき 取 ちち 見 我 懸 想 しかも父にみせ、われをけそうす

ると申しなして、もう 失 うしなわんとせしなり。

頻 婆 娑 羅 おう もう おう けんおう うえ ほとけ おん 檀 那 びんばさら王と申せし王は、賢王なる上、仏の御だんな

の中に閻浮第一なり。なか えんぶ だいいち しかもこの王は摩竭提国の主なり。

ほとけ くに ほけきよう 説 思 おう 仏はまた、この国にして法華経をとかんとおぼししに、王

と仏と一同なれば、ほとけ いちどう いちじよう ほけきよう 説 見 そうら 一定法華経とかれなんとみえて候い

だいただった　もう　ひと

しに、提婆達多と申せし人、いかんがしてこのことをやぶら

破

思　便

んとおもいしに、すべてたよりなかりしかば、ところたばか

びんばしやらおう　たいし　あじやせおう　年　頃

りしほどに、頻婆娑羅王の太子・阿闍世王をとしごろとか

語　漸　ころ　取　こ

仲　もう

くかたらいて、ようやく心をと、おやと子とのなかを申

違　あじやせおう　賺　ちち　びんばしやらおう　殺

したがえて阿闍世王をすかし父の頻婆娑羅王をころさせ、

あじやせおう　ころ　いつ　だいば　あじやせおう　いちみ

阿闍世王と心を一にし、提婆と阿闍世王と一味となりしか

ごてんじく　げどう　あくにん　くも　霞　集

ば、五天竺の外道・悪人、雲・かすみのごとくあつまり、国

給　財　施　ころ　和　賺

をたび、たからをほどこし、心をやわらげすかししかば、

いっこく　おう　ほとけ　だいおんてき

一国の王すでに仏の大怨敵となる。

よつかいだいろくてん

まおう

むりよう

けんぞく

ぐそく

打

くだ

欲界第六天の魔王、無量の眷属を具足してうち下り、

まかだいこく

だいは

あじやせ

ろくだいじんとう

み

い

替

摩竭提国の提婆・阿闍世・六大臣等の身に入りかわりしか

かたち

ひと

ちから

だいろくてん

ちから

おおかせ

そうもく

ば、形は人なれども力は第六天の力なり。大風の草木を

靡

おおかせ

たいかい

なみ

立

おおじしん

なびかすよりも、大風の大海の波をたつるよりも、大地震の

だいち

動

たいか

れんたく

焼

騒

大地をうごかすよりも、大火の連宅をやくよりもさわがし

怖 戦 慄

く、おじわななきしことなり。

波 琉 瑠 おう

もう

おう

あじやせ おう

語

されば、はるり王と申せし王は、阿闍世王にかたらわれ、

しやかぶつ

おんみ

親

ひとすうひやくにんき

殺

あじやせ おう

釈迦仏の御身したしき人数百人切りころす。阿闍世王は、

すいぞう

はな

でし

むりようむへん 踏

殺

みち

酔象を放つて弟子を無量無辺ふみころさせつ。あるいは道

ひようじよう

据

い ふん い

によにん

に兵仗をすえ、あるいは井に糞を入れ、あるいは女人を

語

虚 ごと言

ぶつでし

殺

しやりほつ

もくれん

かたらいてそら事いつけて仏弟子をころす。舍利弗・目連

こと

遭

迦留陀夷

うま

糞

埋

ほとけ

責

が事にあい、かるだいは馬のくそにうずまれし、仏はせめ

いちげくじゆうにちうま

麦

られて一夏九十日馬のむぎをまいりし、これなり。

せけん

ひと

思

あくにん

ほとけ

おんちから

叶

世間の人のおもわく、「悪人には、仏の御力もかなわざ

おも

しん

ひとびと

こえ

吞

物

もう

りけるにや」と思いて、信じたりし人々も音をのみてもの申

まなこ

閉

見

した

振

て

さず、眼をとじてものをみることなし。ただ舌をふり、手

搔

けつく

だいばだった

しやかによらい

ようぼ

をかきしばかりなり。結句は、提婆達多、釈迦如来の養母・

れんげびくに

う

殺

ほとけ

おんみ

ち

い

うえ

蓮華比丘尼を打ちころし、仏の御身より血を出だせし上、

誰の人か、かとうどになるべき。

様々 うえ

かくようようになりての上、いかがしたりけん、法華經を

説たま ほけきよう い

とかせ給いぬ。この法華經に云わく「しかもこの經は、如来

げん いま おんしつ おお

の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」

うんぬん もん こころ わ げんざい そうろう

と云々。文の心は、我が現在して候だにも、この經の御

敵 況 まっだい ほけきよう いち

かたき、かくのごとし。いかにいおうや、末代に法華經を一

じいつてん 説 しん ひと と そうろう

字一点もとき信ぜん人をやと、説かれて候なり。これを

思 そうら ほとけ ほけきよう 説 たま いま

もつておもい候えば、仏、法華經をとかせ給いて今にい

にせんにひやくにじゅうよねん そうら

たるまでは二千二百二十余年になり候えども、いまだ

ほけきよう

ほとけ

読

ひと

そうら

だいなん

法華經を仏のごとくよみたる人は候わぬか。大難をもち

ほけきよう知

ひと

もう

てんだいだいし

でんぎよう

てこそ、法華經しりたる人とは申すべきに、天台大師・伝教

だいし

ほけきよう

ぎようじや

見

そうら

ざいせ

大師こそ法華經の行者とはみえて候いしかども、在世の

だいなん

なんさんほくしち

なんとしちだいじ

しようなん

ごとくの大難なし。ただ、南三北七・南都七大寺の小難な

こくしゆ

敵

ばんみん

劍

握

いっ

り。いまだ国主かたきとならず、万民つるぎをにぎらず、一

こくあつく

吐

めつご

ほけきよう

しん

ひと

ざいせ

だいなん

国悪口をはかず。滅後に法華經を信ぜん人は在世の大難よ

過

そうろう

おな

ほど

なん

きた

りもすぐべく候なるに、同じ程の難だにも来らず。いか

勝

だいなん

たなん

にいわんや、すぐれたる大難・多難をや。

とら 嘯

おおかせ吹

りゆう

吟

くも起

やと

虎うそぶけば大風ふく、竜ぎんずれば雲おこる。野兎の

嘯

ろば

嘶

かぜ吹

くも起

うそぶき、驢馬のいばうるに、風ふかず、雲おこることな

ぐしや

ほけきよう

読

けんじや

ぎ

だん

とき

くに

騷

し。愚者が法華経をよみ賢者が義を談ずる時は、国もさわが

こと

しょうにんしゅつげん

ほとけ

ほけきよう

だん

ず、事もおこらず。聖人出現して仏のごとく法華経を談

とき

いつこく

ざいせ

過

だいなん

見

ぜん時、一国もさわぎ、在世にすぎたる大難おこるべしとみ

そうろう

えて候。

いま

にちれん

けんじん

しょうにん

思

今、日蓮は、賢人にもあらず、まして聖人はおもいもよ

てんかだいいち

びやくにん

そうろう

きようもん

らず、天下第一の僻人にて候か。ただし、経文ばかり

合

そうろう

だいなんきた

そうら

ふぼ

生

にはあいて候 ようなれば大難来り候えば、父母のいき

返

たま

そうろう

憎

事

遭

かえらせ給いて候 よりも、にくきものことにあうより

嬉

そうろう

ぐしや

ほとけ

しょうにん

思

もうれしく候なり。愚者にて、しかも仏に聖人とおもわ

そうら

そうら

れまいらせて候わんことこそ、うれしきことにては候え。

ちしや

うえ

にひやくごじつかい

堅

持

ばんみん

しよてん

智者たる上、二百五十戒かたくたもちて、万民には諸天の

たいしやく

敬

しやかぶつ

ほけきよう

帝釈をうやまうよりもうやまわれて、釈迦仏・法華經に

ふしぎ

だいば

思

ひと

「不思議なり、提婆がごとし」とおもわれまいらせなば、人

め良

ごしよう

恐

目はよきようなりとも、後生はおそろし、おそろし。

との

ほけきよう

ぎようじや

似

たま

さるにては、殿は法華經の行者ににさせ給えり。

承

ひと

親

疎

うけたまわれれば、もつてのほか、人のしたしきも、うとき

にちれんぼう

しん

惑

かみ

みけしき

悪

も、「日蓮房を信じては、よもまどいなん。上の御気色もあ

方 人

ご 教 訓 そろろ

しかりなん」と、かとうどなるようにて御きようくん候な

けんじん

ひと

謀

恐

れば、賢人までも人のたばかりはおそろしきことなれば、

いちじようほけきよう捨

たま

いろ見

良

一定法華経すて給いなん。なかなか色みえでありせばよか

りなん。

だいま

付

もの

ひとり

教

訓

落

大魔のつきたる者どもは、一人をきようくんしおとしつ

引

掛

おお

ひと

責

落

れば、それをひっかけにして多くの人をせめおとすなり。

にちれん

でし

少

輔 ぼう

もう

能

登 ぼう

名

越

あま

日蓮が弟子に、しよう房と申し、のと房といい、なごえの尼

もう

欲

深

こころ

臆

病

なんど申せしものどもは、よくふかく、心おくびように、

ぐち

ちしや

名 乗

奴

原

こと

愚癡にして、しかも智者となのりしやつばらなりしかば、事

起 とき 便 と 得 と 多 と ひと 落 と
のおこりし時、たよりをえておおくの人をおとせしなり。殿

責 たも 落

もせめおとされさせ給うならば、するがにしようしよう信

駿 少 河

々 しん

もの

しん

思

ひとびと

みな

ずるようなる者も、また信ぜんとおもうらん人々も、皆、

ほけきよう

捨

かいのくに

しようしようしん

法華経をすつべし。されば、この甲斐国にも少々信ぜん

もう

ひとびとそうら

い

そうら

と申す人々候えども、おぼろけならでは入れまいらせ候

そうら

中

々

ひと

しん

わぬにて候。なかなかしき人の、信ずるようにてなめり

そうら

ひと

しんじん

破

そうら

て候えば、人の信心をもやぶり候なり。

置

たま

ぼんてん

たいしやくとう

おんはか

にほん

ただおかせ給え。梵天・帝釈等の御計らいとして、日本

こくいちじ

しん

とき

われ

もと

しん

国一時に信ずることあるべし。その時、「我も本より信じた

り、信じたり」しんと申す人こそ、もう おおくおわせんずらんめと

おぼえ候。覚
そうろう

ごしんよう 厚

御信用あつくおわするならば、「人だめにはあらず。ひと 我わが

なきちち おん

ひと わ 親 ごせ 替

故父の御ため。人は我がおやの後世にはかわるべからず。子

われ なき 親 ごせ

用

こ

なれば、我こそ故おやの後世をばとぶらうべけれ。郷一郷知

はんごう ちち

はんごう さいし けんぞく

養

るならば、半郷は父のため、半郷は妻子・眷属をやしなう

わ いのち こと い 来

かみ 進

そうろう

べし。我が命は、事出できたらば上にまいらせ候べし」

思 切 なにごと

ことば

和

と、ひとえにおもいきりて、何事につけても、言をやわら

ほけきよう しん 薄

様

謀

ひと

げて法華經の信をうすくなさんずるようをたばかる人

しゅつたい

わ しんじん

試

思

おのおの

出来せば、我が信心をこころむるかとおぼして、「各々、

ご 教 訓

嬉

おんみ

これを御きようくんあるはうれしきことなり。ただし、御身

教 訓

たま

かみ

ごしんよう 無

をきようくんせさせ給え。上の御信用なきことはこれにも

知 そうろう

かみ

脅

たも

そうら

しりて候を、上をもつておどさせ給うこそおかしく候え。

まい 教 訓

もう

思

そうら

上 手 打

参つてきようくん申さんとおもい候いつるに、うわてうた

そうろう えんまおう

わ み

愛

思

おん

れまいらせて候。閻魔王に、我が身といとおしとおぼす御

妻 こ

引 張

とき

ときみつ

て

擦

たま

そうら

めと子とのひっぱられん時は、時光に手をやすらせ給い候

憎

打

言

わんずらん」と、にくげにうちいいておわすべし。

新 田 どの

真

そうろう

興 津

にいだ殿のこと、まことにてや候らん。おきつのこと、

聞

そうろう

との

便

宜

そうら

ぎ

そうろう

きこえて候。殿もびんぎ候わば、その義にて候べし。

大

ひともう

出

かまえて、おおきならん人申しいだしたらば、「あわれ、

ほけきよう

敵

うどんげ

かめ

う

ぎ

思

法華経のよきかたきよ。優曇華か、亀の浮き木か」とおぼし

ごへんじ

めして、したたかに御返事あるべし。

せんちようまんちよう領

ひと

いのち

捨

千丁万丁しる人も、わずかのことにたちまちに命をす

しりよう

召

ひと

こんど

ほけきよう

いのち

て、所領をめさるる人もあり。今度、法華経のために命を

惜

やくおうぼさつ

み

すつることならば、なにはおしかるべき。薬王菩薩は身を

せんにひやくさい

あいだ焼

尽

ほとけ

成

たま

だんのう

せんざい

千二百歳が間やきつくして仏になり給い、檀王は千歳が

あいだみ

床

いま

しゃかぶつ

言

たも

間身をゆかとなして今の釈迦仏といわれさせ給うぞかし。

僻へい こと

さればとて、ひが事をすべきにはあらず。今は、すてなば、

ひと 笑

かえりて人わらわれになるべし。かとうどなるようにて、

作 落

われ 笑

ひと

つくりおとして、我もわらい、人にもわらわせんとするが

奇 怪

教 訓

ひと おお 聞

きかいなるに、よくよくきようくんせさせて、「人の多くき

ひと 教 訓

わ み

かんとおろにて人をきようくんせんよりも、我が身をきよ

立 たま いちにちふつか うち

うくんあるべし」とて、かつぱとたたせ給え。一日二日が内

聞 そうろう こと 多 もう

にこれへきこえ候べし。事おおければ申さず。またまた申

きようきようきんげん

すべし。恐々謹言。

けんじさんねんごがつじゅうごにち

にちれん かおう

建治三年五月十五日

日蓮 花押

うえのどのごへんじ
上野殿御返事